

官民共創の新しいまちづくり協議会

対話・つながり・実現の場

キックオフイベント開催報告

新しいまちづくりはじめます

開催概要

- 日時 : 2025年1月21日 (火) 18:00-20:00
- 開催場所 : 伊那市生涯学習センター / いなっせ5-6F
501-503会議室 / ニシザワいなっせホール・ホワイエ
- 参加者 : 約230名 (一般参加: 約170人、協議会メンバー、市職員、関係者: 60人)

プログラム

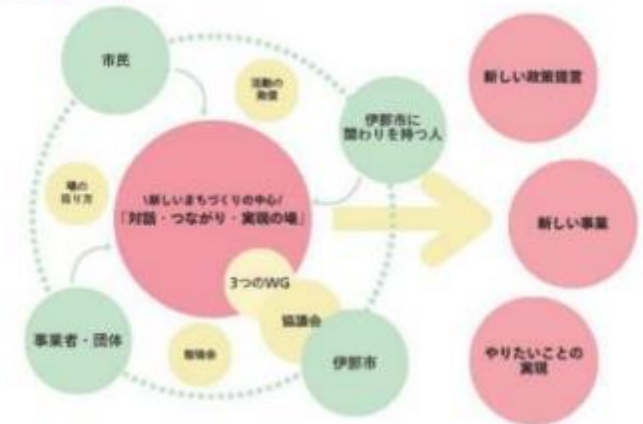
1. これからの新しいまちづくりについて
(白鳥市長・平賀ディレクター)
2. 対話の場
(3つのチームに分かれて対話しよう！)
 - ①伊那北駅前の将来について
 - ②伊那弥生ヶ丘高校の将来活用とまちづくり
 - ③まちなかエリアのまちづくり

対話の場のテーマ

- ①伊那北駅前の将来について
ー伊那北駅前の今と未来ー
- ②伊那弥生ヶ丘高校の将来活用とまちづくり
ー対話してつながって、伊那市の「いきるとまなぶ」を実現しようー
- ③まちなかエリアのまちづくり
ーいなまちとどう関わってきましたか。いなまちでどう過ごしたいですか。ー

対話・つながり・実現の場

スキーム図

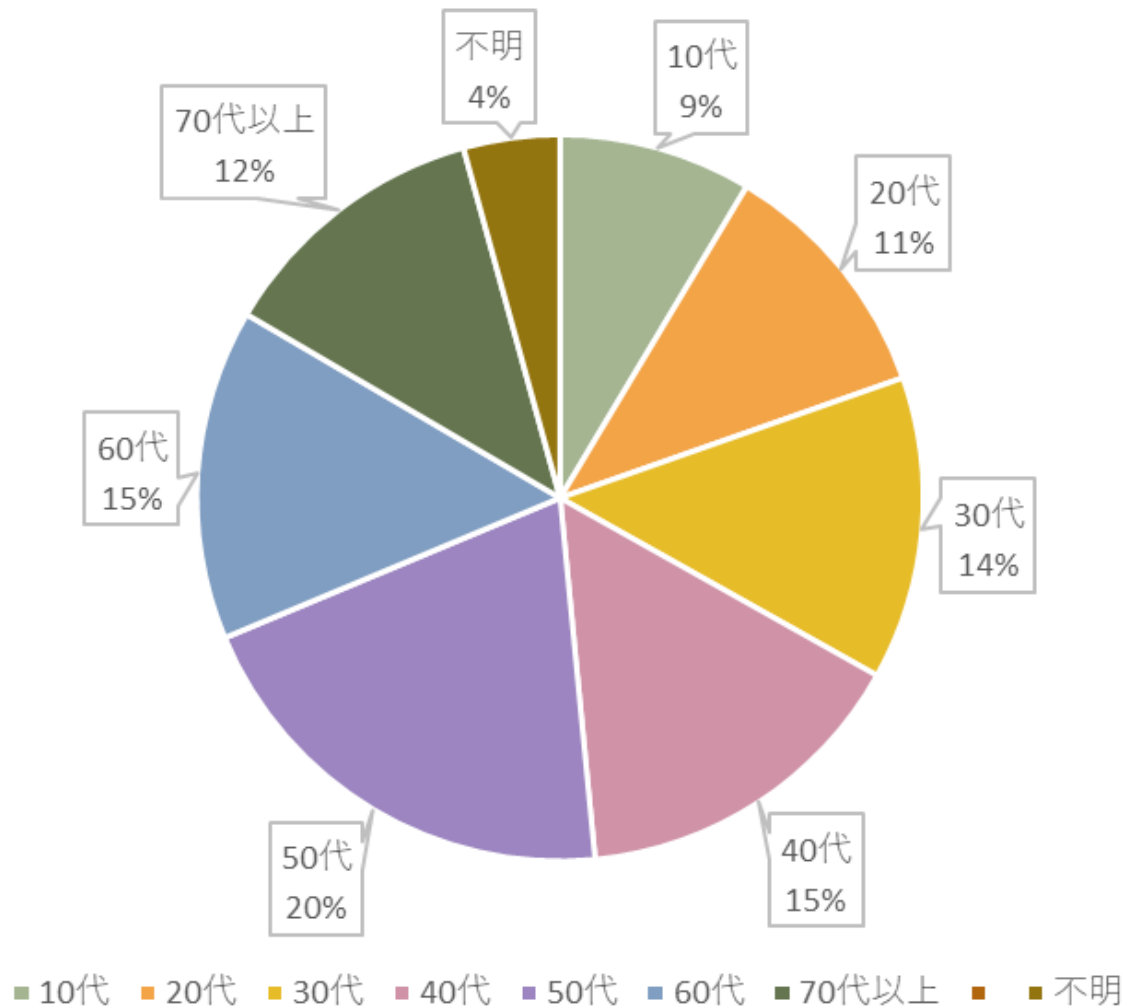


対話・つながり・実現の場

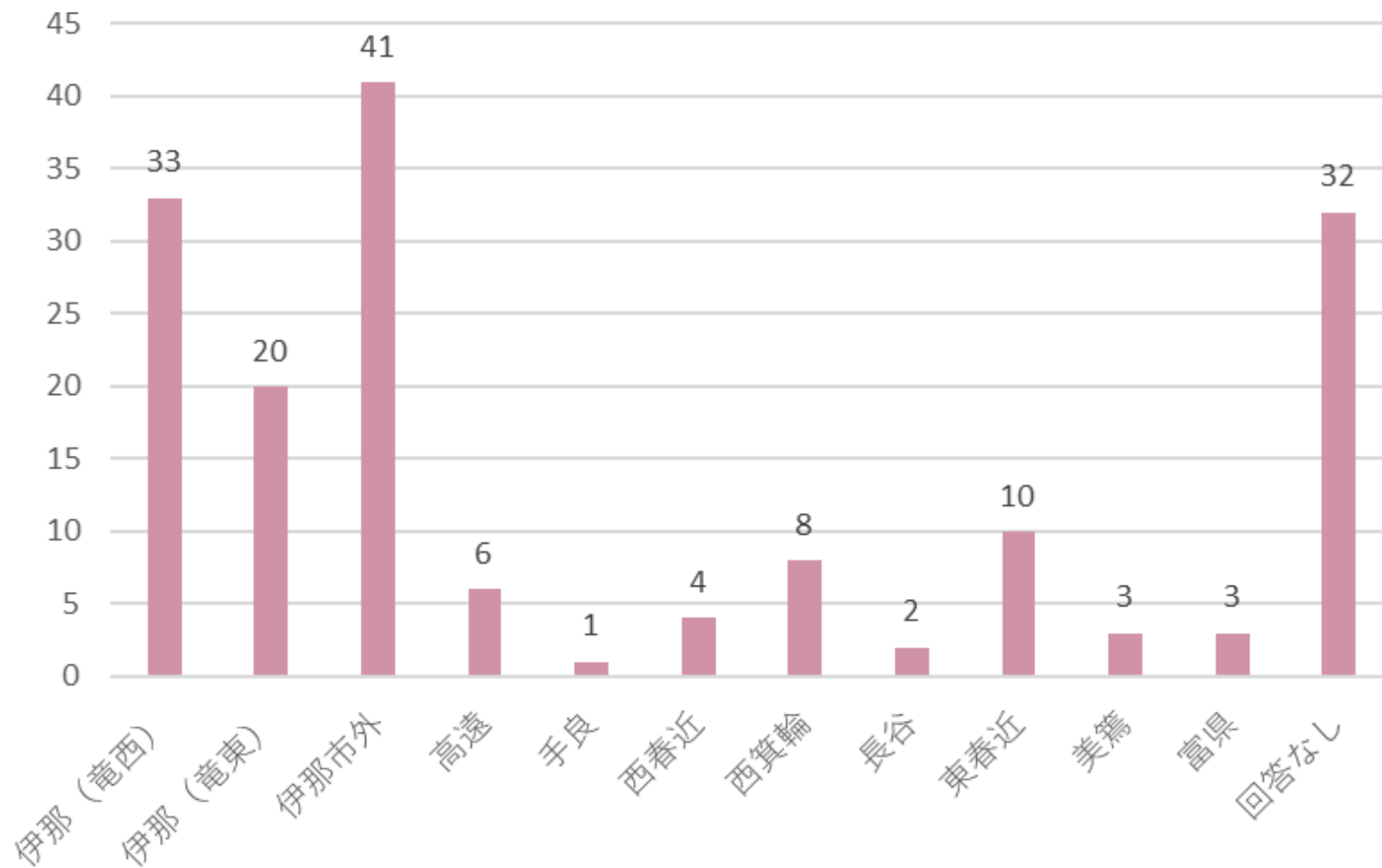
やくそく

- ・所属や団体を意識しないで、一個人として参加しよう。受け取る側もそれを理解しよう。
- ・何を話しても大丈夫。
- ・人の発言を受け入れる。
- ・聞いているだけでもいい。
- ・お互いに問いかけ、アイデアをどんどん膨らませよう。
- ・知識ではなく、自分の経験をもとに話そう。
- ・意見が変わってもOK!
- ・話がまとまらなかったり、わからなくなってもいい。
- ・発言は短く、みんなが話せる場をつくろう。

年代別一般参加者



住所別一般参加者



○白鳥協議会長（伊那市長）「市民が主役のまちづくり」

伊那新校、上伊那総合技術新校の開校を契機に、若者がまちなかに滞留したり、交流したりと、様々な可能性がある。

「まち」は、全ての皆さんにとって大事なもので、新しい時代に向けて、多様な皆さんとこれからの伊那市のまちを共に考えて創っていききたいという想いで「新しいまちづくり」を始めた。

この新しいまちづくりを進める背景には、人材を含め、この地域で循環をしていく持続可能な社会を作りたいという想いがある。

新しいまちづくりは、10年、20年とかかる取組になる。次の世代へのバトンタッチを見据え、まちづくりを繰り返しながらこの地域を維持していく。

その結果として、日本を支え、さらには、日本を変えていきたい。



○平賀研也ディレクターより

今回はたくさんの方にお集まりいただきありがとうございます。

誰かがやってくれるまちづくりに意見する、ではなく、自分がつくる、取り組む人と共にある。

そんな、つながり、対話し、実現する場をどうしたらできるだろうか。

対話の場をつくった経験のある市民と行政の皆さんが集まり、そんな場のあり方を考えてきました。

これからは、参加される皆さんと共に考え、試行錯誤しながら共創の場をつくっていければと思います。

いつでも、思い立った時に、ふらりと参加でき、まちのこと暮らしのことを気軽に話せる場。

もっと知りたい、もっとやりたい、やってみようが生まれる場。

そんな新しくゆるいコミュニティが生まれる場。

そんな、いつでもそこにある場に育てていきましょう。





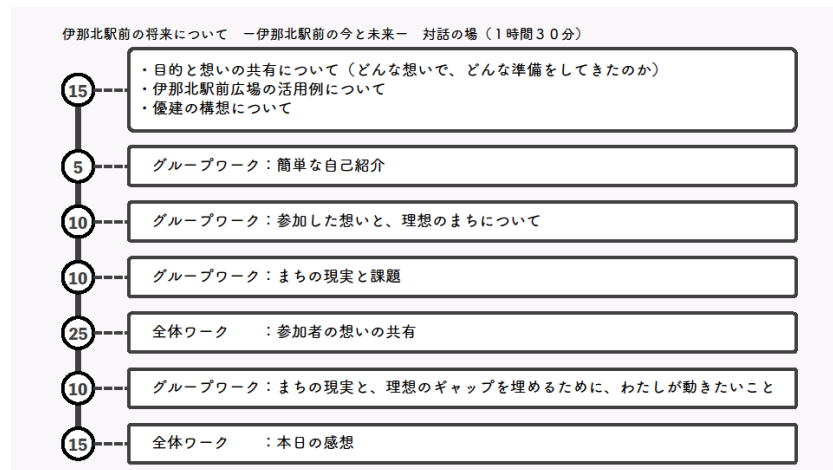
官民共創の新しいまちづくり協議会

対話・つながり・実現の場

伊那北駅周辺再生WG

伊那北駅前の将来について - 伊那北駅前のいまと未来 -

対話の進め方



対話の場の目的

- ①参加者全員が少しでも自分事になること
- ②ガス抜きにならないよう真剣に対話できる場

対話の進め方

- ①情報共有
 - ・目的と想いの共有について (どんな想いで、どんな準備してきたのか)
 - ・伊那北駅前広場の活用例 (17とりどり祭) について
 - ・優建の構想について
- ②理想と現実を語る
 - ・グループワーク：参加した想いと、理想のまちについて
 - ・グループワーク：まちの現実と課題
- ③グループで話し合ったことを全体で共有
 - ・伊那北駅前周辺の地図を軸に席を移動
 - ・時間が許す限り、一人ひとりの意見を発表
- ④ギャップを埋めるアクションを語り合う
 - ・グループワーク：まちの現実と、理想のギャップを埋めるために、わたしが動きたいこと
- ⑤感想記入

事業説明



伊那北駅周辺整備事業 ロードマップ

実施年度	STEP 1	STEP 2	STEP 3	STEP 4	STEP 5	STEP 6	STEP 7	STEP 8
駅前整備	令和5年度	令和6年度	令和7年度	令和8年度	令和9年度	令和10年度	令和11年度	令和14年度
高層ビル		基本構想策定	事業計画策定	2R以上の建設	事業認可	高層ビル建設	事業完了	事業完了
駅前整備	令和5年度	JRとの協議	JRとの協議	JRとの協議	交付金交付	公共施設整備	公共施設整備	竣工
駅前整備	令和5年度	事業計画策定	事業計画策定	事業計画策定	事業計画策定	事業計画策定	事業計画策定	事業計画策定
駅前整備	令和5年度	事業計画策定	事業計画策定	事業計画策定	事業計画策定	事業計画策定	事業計画策定	事業計画策定
駅前整備	令和5年度	事業計画策定	事業計画策定	事業計画策定	事業計画策定	事業計画策定	事業計画策定	事業計画策定
駅前整備	令和5年度	事業計画策定	事業計画策定	事業計画策定	事業計画策定	事業計画策定	事業計画策定	事業計画策定





ファシリテーターよりコメント

フランセ板屋さんが、熱い思いを語ってくれたことで場に大きな影響を与えた。

おおよその内容は、「わたしが若い頃は、駅周辺で若者が遊んでいる姿があったが、今は若者が遊ぶ姿がなくなり、とても寂しい。若者が駅前広場を活用してくれると嬉しい。」

上記を機に、大人たちが「若者にとってよいまちにしたい」という発言が多く見受けられるようになった。記入して頂いた感想からも、一定の満足度を得たという意味では良い場であったと判断できるかもしれません。

しかし、最後に発言した参加者から、「情報差分を埋めて、対等な関係をつくらないと、今後は効果的な対話はできない」といったような言葉を受けました。次回開催する際は、少しでも情報公開に努めなければ効果的な対話の場をつくることは難しいと感じています。行政側の事情も理解できますが、これまでの伊那北駅前周辺再生WGの進め方においても行政側から共有される情報が小出しの印象があります。

官民共創の新しいまちづくり協議会

対話・つながり・実現の場

伊那弥生ヶ丘高校将来活用WG

伊那弥生ヶ丘高校の将来活用とまちづくり

-対話してつながって、伊那市の「いきるとまなぶ」を実現しよう！-

対話の進め方

- ・高校再編の日程、市の活用案作成の進め方について説明
- ・WGメンバーの本プロジェクトに係る“想い”を含めた自己紹介
- ・本プロジェクトのゴール（プレゼン資料）とスケジュールについて説明
- ・プロジェクトの規模感について説明

Contents 本日の流れ

02. 個人ワーク（5分）
03. グループワーク&まとめ（40分）
04. 今後に向けて（5分）
05. 個人ワーク（10分）
06. アンケート

今後に向けて



インプットを繰り返して、アウトプットへ。どんなインプットがあったらいいですか？

- ・02. 個人ワーク：
本プロジェクトに参加した“想い”についてA4 白紙に記載
- ・03. グループワーク：
“想い”の内容によりグルーピング（6つ）。
各グループで、自己紹介、“想い”について話す、聞く。
- ・04. 今後に向けて：
WGで考えている日程を紹介。
参加者と「勉強会」の開催と対話を重ねていく。
本プロジェクトのゴール
→参加者「プレゼン大会」を12月に開催
- ・05. 個人ワーク：
「本日参加して感じたこと。」「今後何をしたいですか。」
について付せんに記載、模造紙に貼付。

規模感の共有



およその広さ

RCの校舎:各階 教室7.5個×7階=52.5教室分
 教室1個:約65㎡
 図書館+教室3個
 大体育館 1000㎡以上
 小体育館 500㎡以上
 格技室 500㎡以上

- ・敷地面積、校舎の大きさについて写真を見ながら説明
- ・整備、解体ともに大きな費用が想定される。
- ・施設のランニングコストに大きな費用が想定される。

以下、例として施設イメージの共有
 ・フレンドリーな街の顔となる施設
 ・車でアクセスしやすい整備
 ・お金のかからない建物 ...etc

規模感の共有

規模感の共有





各グループで出た“想い”を整理

誰もが交流できる学びの場 / 公教育や社会の下支えとなる場 / 企業と学びが融合する場
伊那市、弥生ヶ丘高校の歴史、文化を発信する場 / ワクワクを体験できる場

ワーキンググループからのコメント

40名を超える参加者が全員「想いを声に出せる」事を目的として行いました。平日の夕飯時にも関わらず、年齢・性別・立場の異なる人々が並々な想いをもって来られ多くの方が「話したくて仕方ない」という状態でした。形式としては、「今日何を話したくて、聞きたくて来ましたか？」という問いに対して、各自A4紙に書いて発表。似たテーマ・カテゴリーの人々をグループとして各グループにwg担当者がファシリテーターとして入り想いを表現していただきました。弥生に対する想い、学校に対する想い、教育論、生涯学習、障害者支援、不登校、地方創生、文化育成、事業としての成功、などなど多種多様な価値観と願いが交錯する場所になりました。「市民の声を聞く」というコンセプトの初回としての役目は果たせたのではと思います。今後は交流を通じて、少しずつ実現に向けての行動へかじを切るために勉強会と年末へのプレゼン大会へ向けてイベントを進めていく予定です。



- ・伊那市には、「伊那ならではの」の学びがある。
- ・弥生ヶ丘高校の歴史で培われてきた学びを伝えていきたい。
- ・流域で考えるとどんな場になるのか。
- ・テクノロジーと自然の両方あるのが伊那市。ともに学べるのが伊那市。

私達のグループは「伊那らしさを考えたい」という集まりで、「奥深く重要なテーマ」という共通認識がありました。まずは個々人が感じる「伊那らしさ」を聞き、共通項の抽出を試みました。端的にまとめれば「伝統と革新」「暮らしの学び」「寛容性」。そこで時間切れになりましたが、今後「らしさ」とは何？必要？型とならないか？等の問いを提示し、らしさが必要ならなぜ必要かを考えるのも良いと感じました。「自然には同じモノは二つとない」とすれば、この場も独自のカルチャーやデザインコードを見い出せれば、独自のコンセプトのある新しい伊那の軸となり得ると感じました。



- ・ 弥生ヶ丘高校の思い出を語った。
ひばり屋、銀杏並木、部室...
- ・ どんなことでワクワクしていけるか。
サブカル系、アートビレッジ、ニュースポーツ...
- ・ いろんなことが入ったり、出会ったり、新しいものが生まれたり、ということが起こるような使い方。
- ・ 集まってくる人同士で教え会える場、体験できる場

私たちのチームは、「ワクワク」したい。をベースに話しました。様々なコンテンツのアイデアが具体的に出てきて、ワクワクします。その中でも、みなさん共通だったのは、ただそれぞれにスペースを使うのではなく、それぞれの専門性を持って、学びに貢献する活動もセットで行ったら良いよねというお話しでした。みんなが自分の活動しながら、公共性のある学びのための活動を提供することで、もっと繋がり、もっと深まる。そんなふうに考えられることが素敵だなと思います。



- ・諏訪や茅野で実施している「プレイパーク」のような子供が自由に遊べる場になればよい。
- ・何かの「聖地」になるような施設にすれば人を呼べるのではないか。
- ・国県の補助などを活用して、スケートボードの施設を作ってほしい。
- ・伊那市が敷地建物を使って何をしたいのかを示してくれると思い参加した。
- ・夢ばかりを語っていても恒久的に維持できる施設とはならない。現実には、収益性を考え、お金が落ちる施設でなければ継続できない。
- ・銀杏並木など残しつつ、人が集まる「居場所」になれば良い。
- ・地元の方々と繋がる様な場所がほしい。

グループ③ワクワクする場では、7名の方にお集まりいただき、「想い」を語っていただきました。

大学生から社会人の方まで幅広い方のお話を伺うことができました。

皆さんからは、それぞれのワクワクできる提案がされましたが、大きな施設の維持のためには収益を生む施設でなくてはいけないという現実的なお話も出され、理想と現実について考える機会にもなりました。時間に限りがあり、もっと皆さんからお話を聞き出したかったです。



- ・多世代で集まって、学び会える場所になればいい。
- ・弥生ヶ丘高校にあるお宝を展示する場
- ・施設の活用の中で収入を生みながら、持続的な施設としていくことも考えていく。

学びの場①では、9名の方にお集まりいただき、弥生ヶ丘高校の将来活用について「想い」を語っていただきました。

社会教育の学びの場、平和教育の学びの場、高校にある貴重な教材の展示の場など、総じて、子どもからシニアまでの多世代の居場所となり、新たに学びあえる場が必要とのお意見が出されました。また、施設を持続可能なものとしていくためには、収入を生み出し、自走していくことが必要とのお意見も出されたところで終了してしまいましたが、皆さんからどんなご意見が出てくるのか、もう少し聞いてみたかったです。



- ・暮らし、学び、仕事と同じところにあるのが伊那市のよさ、大切。
- ・社会的弱者、マイノリティの人達をサポートするような場、社会を下支えする場
- ・誰もが自由に学べる場、交流できる場
- ・企業と学びが融合する場
- ・不登校支援、公教育を下支えする場、日常的に地元と関われる場
- ・日常的に暮らしをつくっている場。共同体、コミュニティ、ビレッジのようなもの。

グループ⑤学びの場は、あらゆる世代、あらゆる状況の人も学び、助かり合える場になって欲しいという考えが共通していました。

誰もが生涯学び続けられる場、ふらっとそこに行けばちゃんと受け入れてもらえる場、誰かに寄り添える場、仕事と暮らしと学びが繋がってる場、、、伊那市民は何歳になっても生涯学べる！学ぶ民でありたい！



- ・伊那ならではの、弥生ならではの歴史や文化を、学びと一緒にどう残していくか。
- ・不登校支援、子どもの居場所づくりといった場所をつくっていくにはどうしていったらよいか。
- ・子どもからお年寄りまで、外国籍にルーツを持つ方とか、大人も含めて、ともに集まって、学びあって交流する場として活かせるのではないか。
- ・現状から学びながら、未来の学びを創っていく。
- ・高校の卒業生の方にいろんな話を聞かせてもらって案内してもらいたい。
- ・地域の中の高校の在り方を学びながら、どう生かして具体的なアクションにつなげていけるか考えていきたい。

グループ⑥学びの場では、参加者の皆さんがさまざまな関心やバックグラウンドを持ち寄る中で、弥生ヶ丘高校を中心にした学びのあり方について話し合いました。その中で、今まで地域と共に生まれ大切にされてきた「これまでの学び」と、今後のまちの未来や自分たちの暮らしのあり方をつくっていく「これからの学び」という、2つの視点で話が進んでいったように思います。これまでとこれからをうまく重ね合わせながら、大切なものを受け継ぎ、多様な人たちが互いに学び合う中で、それぞれの暮らしを営んでゆく。そんな場をこれからつくっていききたいと思いました。

官民共創の新しいまちづくり協議会

対話・つながり・実現の場

まちなかエリア高度化WG

まちなかエリアのまちづくり

-いなまちとどう関わってきましたか。いなまちでどう過ごしたいですか。-

③まちなかエリアのまちづくり

-いなまちとどう関わってきましたか。いなまちでどう過ごしたいですか。-

官民共創の新しいまちづくり協議会

対話の進め方

<まちなかエリア高度化WG>

第1回

ダイアログ「対話の場」～ワールドカフェ～

1月21日 (火)
18:30～20:00

ワールドカフェとは

ワールドカフェとは、カフェのようなリラックスした雰囲気の中で自由に対話する手法です。「対話」は「会話」や「議論」とは異なります。結論を出したり課題を解決したりする目的ではなく、お互いの理解を深め、新たな気づきを得ることを目的とします。チームで何かを作りあげるといったことはなく、各グループの対話はメンバーに任せます。

グラントルール

- ・何を話しても大丈夫
- ・人の発言を受け入れる
- ・聞いているだけでいい
- ・お互いに問いかけ、アイデアをどんどん膨らませよう
- ・知識ではなく、自分の経験をもとに話そう
- ・意見が変わってもOK!
- ・話がまとまらなかつたり、わからなくなってもいい
- ・発言は短く、みんなが話せる場をつくる
- ・所属や団体を意識しないで、一人人として参加しよう
- ・受け取る側もそれを理解しよう

は 新すかしがらずに、どんどん話す、書く
ひ 否定しない! 自分と違った意見も、「それもあるね」
ふ ふせん一席に一意見。なるべく決山、なるべく短く
へ、へ! それ、いいわ! 質問して意見を広げる
話、他の人、グループの意見を聴く、はめる

1

<まちなかエリア高度化WG>

時間スケジュール

18:45～19:45 (18:30-20:00)

(5min いなまちヒストリー)

20min 出合いカフェ (第1ターム)

5min 中間ラップアップ・席替え1

15min 対話カフェ1 (第2ターム)

5min 中間ラップアップ・席替え2

15min 対話カフェ2 (第3ターム)

(15min 全体共有・ラップアップ)

問い

- あなたはこれまで、いなまちとどう関わってきましたか?
- あなたは今、いなまちとどう関わりたいですか?
- あなたはこれから、いなまちとどう関わっていきたいですか? (いなまちでどう過ごしたいですか?)

ふせんピンク 1 これまで

ふせん黄 2 今

ふせん青 3 これから

1

いなまちヒストリー/土田智氏より (まちなかエリア高度化WG)

1.伊那まちのエリアはどこ?



2.伊那まちの歴史 (大店立地法～空洞化)



3.やるじゃん会の活動 (2013年～)

2013年以降は、「モノ」の集積地としての商店街からの脱却をテーマに、情報や地域の「価値・コト」が集まるコミュニティとしての商店街づくりをしてきた。

一方で店主らの高齢化など、委員会もなかなか続けられなくなっている。しかし、彼らの強い意志があったことで、「活動」として継続されてきた。

農
いなまち朝マルシェ

森林
KEESプロジェクト

人
ローカルベンチャーミーティング

学び
たしゅう室
それぞれいなまちBASE

「地域の価値が集まる所へ」

●商工会議所が事務局を担い、連携・推進する形
●若いひとや移住者とをつなぐ「やるじゃん会」の機能





ワーキンググループからのコメント

まちなかエリア高度化WGでは、ダイアログ「対話の場」と題して、ワールドカフェ形式※1で実施しました。冒頭に、これまでのいなまち※2の歩みを全員でシェアした上で、参加者が一人ひとりがいなまちとの関わり合い（過去・現在・未来）について、所属や世代、出身を超え、多くの人同士で対話を行いました。

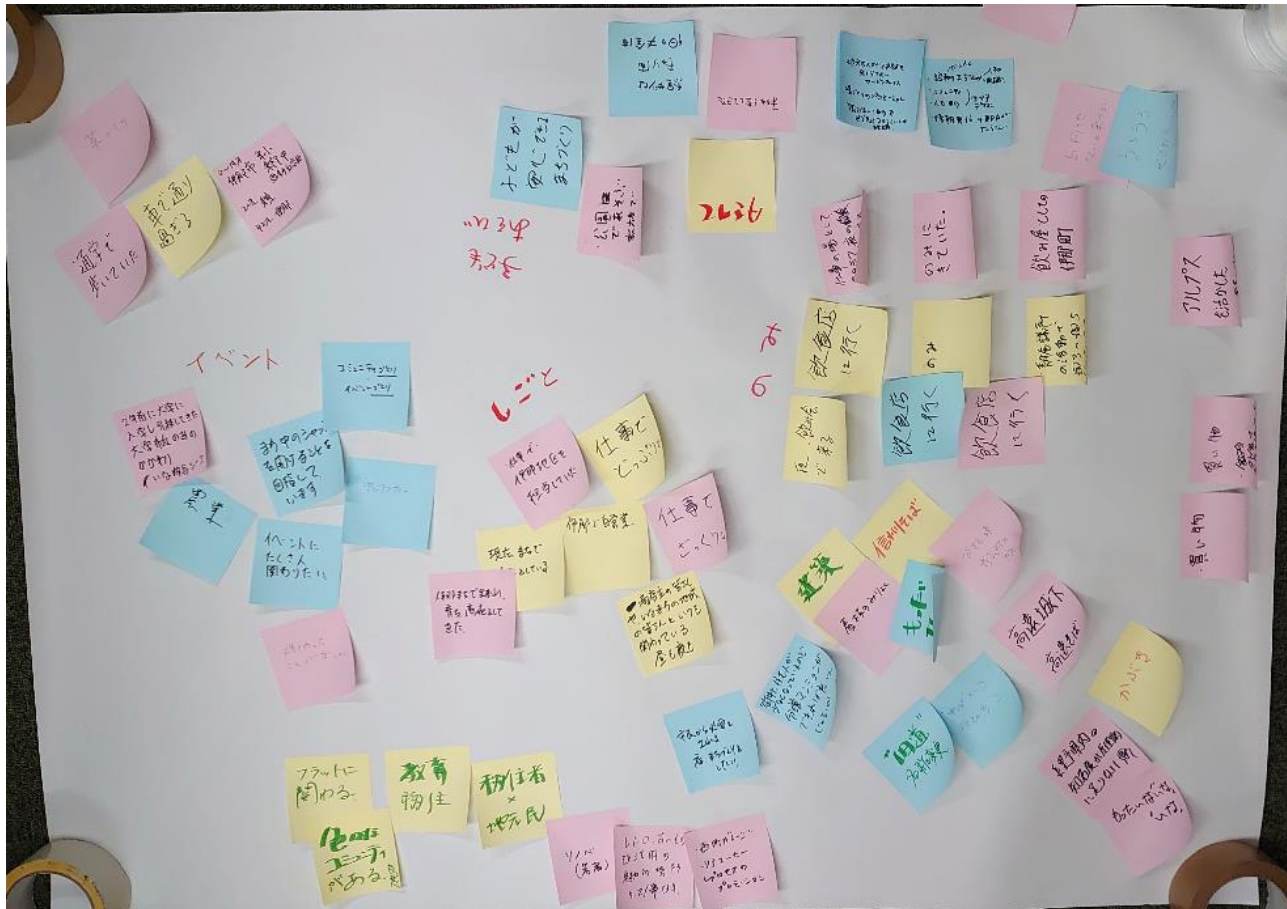
各テーブル毎に対話の内容がユニークであったり、逆に似たような内容であったりと様々でしたが、キーワードとして、「古いものが魅力的」「人とのつながり、つながる場所」「くつろぎ、安心のまち」「サードプレイス」などがあがり、魅力があるのに自分たちが知らない、まだ知られていないなどから「プロモーション」「発見」などが上がりました。今回の内容をもとに対話を重ねていき、まずは集まった皆さんが主体となって関わっていく小さな活動が、タイミングを見て複数できていくような、そんなWGになるように、進んでいく予定です。

※1 ワールドカフェとは場に集まったメンバーの相互理解を深めるための対話を行う手法です。議論をしたり結論を導き出したりするものではなく、お互いの理解を深めることで、新たな気づきを得るために、各グループはそのメンバーに任せて対話を進めて行きます。

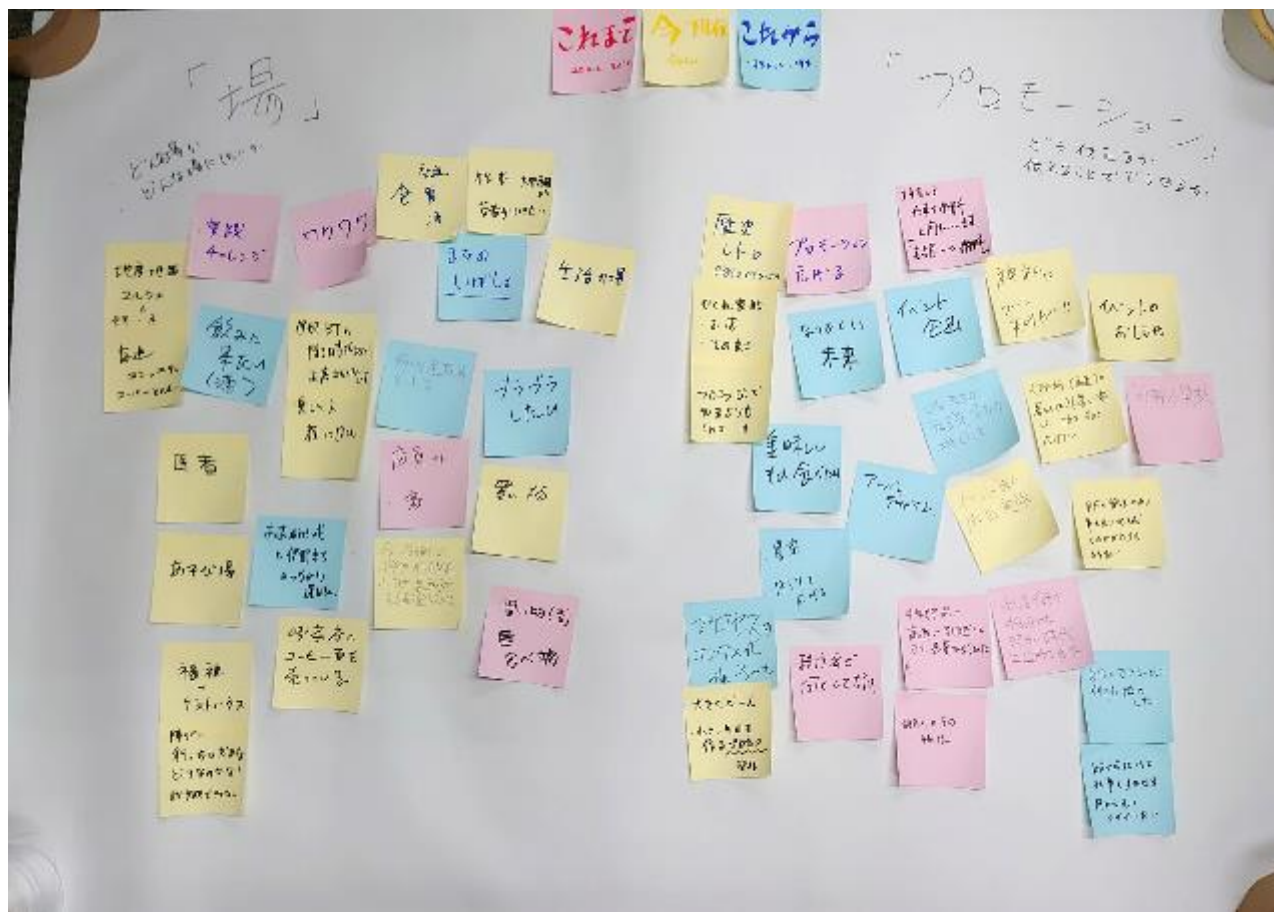
※2 いなまちは伊那市西町から山寺までの約1.5km長あたりのエリアを指してきました。初回はこのエリアをイメージして対話を進めましたが、竜東地区など、他のエリアも含め、対話の中から新たな芽が出てくればと思います。



外に向けてアピールできるようないなまちの魅力は特になく思っていたが、まちの人に聞いてみると知っている人はいろいろな情報があり、様々な魅力がある。人のつながりによって情報が得られるので、そのような機会が得られるような場作りが必要。人の繋がり、関わりがまちから出て行きたくなる“しがらみ”というようなネガティブなものになるのか、“安心”“セーフティーネット”というようなポジティブなものになるのかで大きくまちの捉え方が変わるといった話が深まりました。



いなまちへの関わり方は、労働、飲食、買い物、素通り、など。いなまちに対して人も情報も「集まる」印象がある一方で、「中心」市街地という呼び方に違和感を覚える意見も。たしかに、分杭峠、歌舞伎、高遠そばなど伊那の魅力は中心市街地以外にもたくさん。この魅力が伝わっていない現状を変えたいという意見も出た。また、伊那にはまちづくりに積極的な人も教育に熱心な人も自然との暮らしに憧れる人もただ故郷が好きなのもいて、多様なコミュニティがある。それらが関わり合っても合わなくてもいい、そんな緩やかなまちがいいのかもしれない。



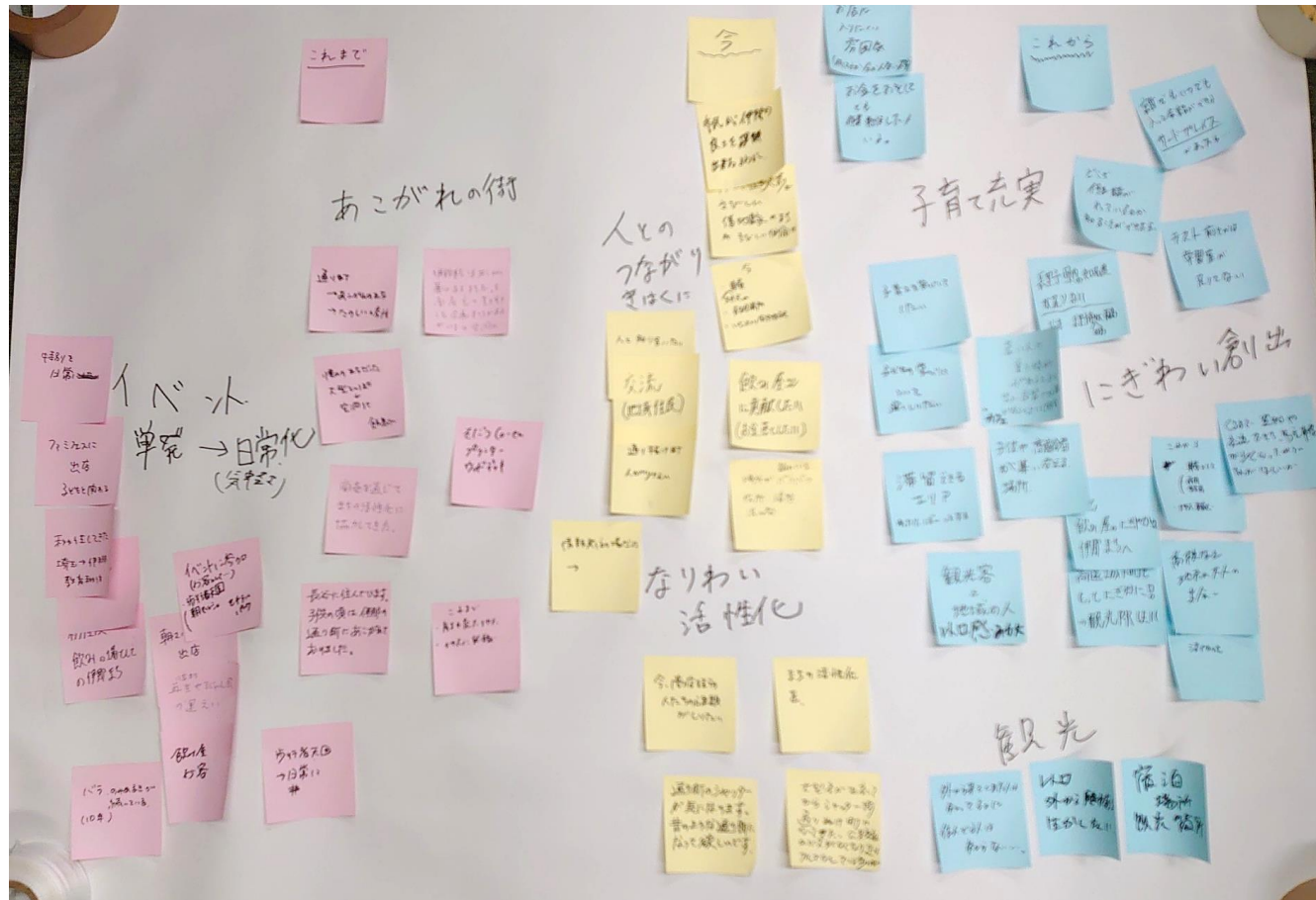
様々な属性の方で、いなまちの過去と現在、未来に焦点を当てながら対話することができた。総じて、いなまちにはレトロが形として残っていること、起こっている事や暮らしている人などの「雰囲気・存在としての良さ」、福祉の観点や付加価値、サードプレイスなどの「場としてのさらなる進化」などの論点が見えてきたと思う。また、プロモーションの必要性や、いなまち自身が伊那市のフラッグシップとしての顔となるような活動など、「プロモーション主体としてのいなまち」といった論点も導かれた。



「過去」～「現在」～「未来」、参加者それぞれにいなまちと様々な関わりがあった。

「過去」～「現在」のキーワードは「生活」。買物する、飲食する、学生生活を送る、商売を営む、仕事をしに来る場所。

「現在」～「未来」のキーワードは「発見」と「くつろぎ」。魅力的なお店・空間、人との繋がりを発見する場所、気軽に立ち寄れる場所、何も考えずにゆったりくつろげる場所。参加者は、年齢も立場も思いもさまざまであったが、皆「やくそく」を守り、自然と「共感」を示しながら対話が行われ、緩やかに「思い」を共有できる場となった。

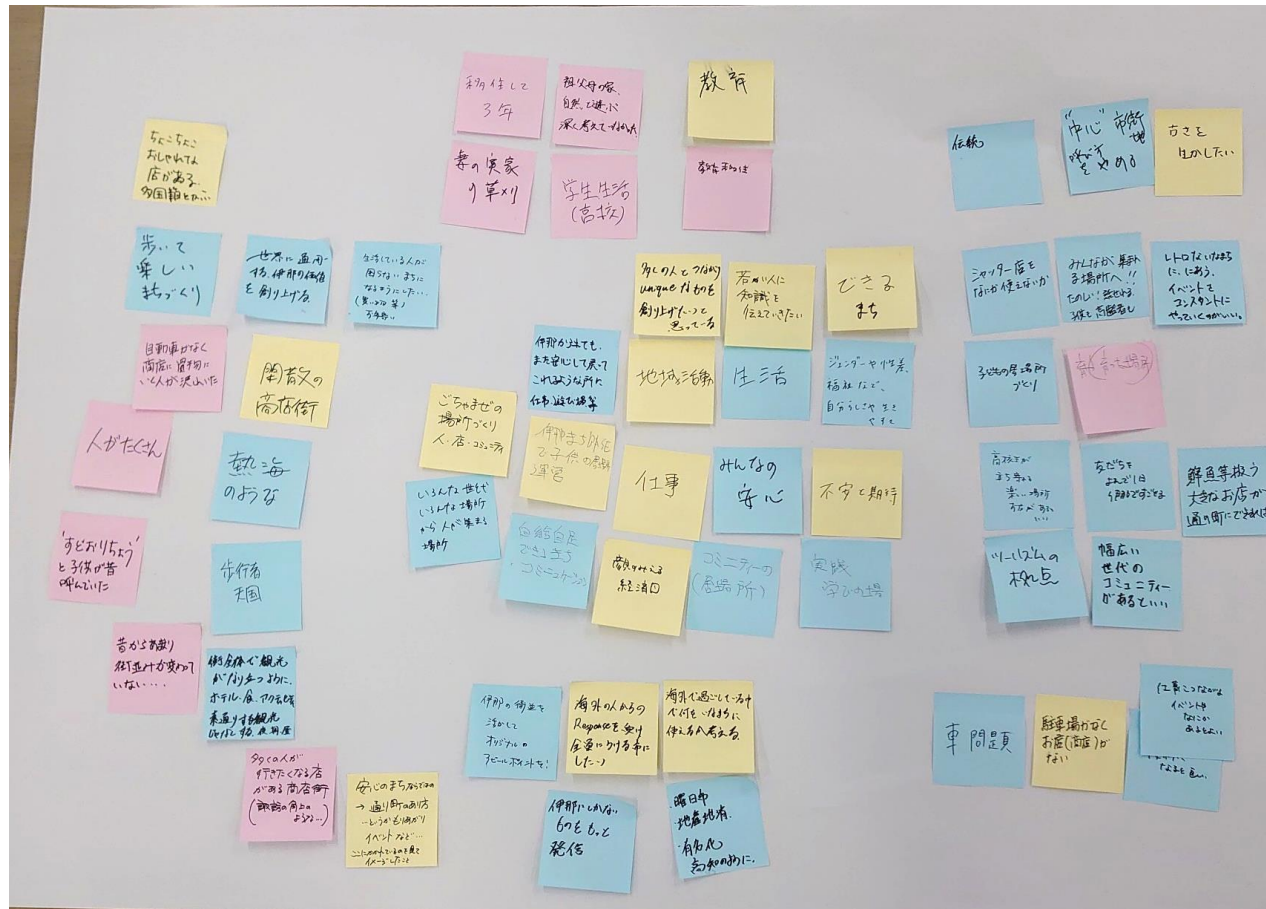


参加者は、移住者の方が多かったが、これまで中心市街地で活動されてきた方、郊外在住者、高校生など様々だった。前向きな意見が多く、出された意見に、重ねて発言するといった活発な場となった。

主な意見は、レトロな魅力がある、公共機関等が点在しており、時間を有効に過ごせる場所があるとよい、1つの用事が済むと離れてしまい滞在しない、高校生と住民がつながる場や人を呼び込む観光ポイントがあるとよい等であった。



古いものの魅力や、一見ネガティブな「シャッター通り、旧道という呼び名」など、深掘りできそうなワードが多く出た。その対象との具体的な「楽しい／悲しい」という自らの感情・経験を基にした対話への発展を期待したい。まちを俯瞰した客観的視点から主観的語り（ナラティブ）を拾い合う場へと繋げたい。また、「不便な故に、近所付き合いなどのコミュニケーションが起きる」という話題があった。ICTなどの導入検討では、利便性や合理性の追求だけでなく、不便さから得られる価値を積極的に取り入れる「不便益という視点」が欠かせないだろう。



生業をして暮らす人、学生生活を送る人、外から来て活動する人など、いなまちへの関わり方は様々であるが、皆さんそれぞれの生活の場としてまちのあり方を考えていた。安心して暮らせるまち、なんでもできる（可能性がある）実践のまち、学びのまち、交流のまち、自給自足・地産地消ができるまちなど、いなまちへの思いを共有できた。